

## 南スーダンにとって初となるオリンピック参加

日本に帰国後、すぐに理事長と面会し、帰国報告を行った。3カ月前に理事長から、南スーダンにとつて初めてとなるオリンピック参加支援について話されたことが思い起こされた。理事長は、オリンピック派遣はどうですかと聞かれた。私は、この状況のなかではさすがにオリンピックに参加することは難しいと思っていた。しかし理事長は、「南スーダンの人々が困難な状況においてこそ、国民としての一体感と誇りを醸成することや、南スーダン・JICA双方の関係者が国民に対し平和と結束を訴えることが重要ではないか」とおっしゃった。この状況においても理事長は、オリンピック派遣支援を諦めていない。いやむしろ、こういうときだからこそ、平和の祭典であるオリンピックに南スーダンが参加すべきであると考えていたことに強い驚きと感銘を受けた。そして、JICAは、リオ・オリンピックに南スーダンとして初となる参加支援を諦めずに行うことを決断したのであった。

国外退避した直後で、私も含めて所員たちは特別休暇を与えられていた。激しい銃撃戦が行われているなか国外退避して間もなくであったため、少しの音にも敏感に反応していた。いつもなら平気で見ることができる戦闘シーンのある映画もさすがにみたくなかった。そんな状況のなか、派遣支援準備のため休暇を返上し、JICA南スーダン事務所は東京で業務を再開したのであった。このとき、リオ・オリンピック開催日まで3週間と迫っていた。

南スーダン政府の方も、この紛争でオリンピック参加は諦めているのではないかと思っていた。しかし、ジュバ市内での銃撃戦が収束すると、文化・青年・スポーツ省や南スーダン・オリンピック委員会の関係者らは業務に戻り、代表選手3名はオリンピックに参加するための準備を進めているとの情報が入った。紛争が繰り返し行われてきた国だけあって、頼もしいとさえ思った。JICA事務所の現地スタッフもしばらくは事務所に戻らなくてよいと指示していたにも関わらず、彼らは、自発的に事務所勤務を開始していた。事務所は、連日、文化・青年・スポーツ省や南スーダン・オリンピック委員会の関係者や現地スタッフと連絡を取り、派遣準備を進めた。そして、リオ・オリンピックには、イッガ副大統領、南スーダン・オリンピック会長、同副会長、文化・青年・スポーツ省大臣、アグム事務次官、エドワード局長、コーチ、選手たちが派遣されることとなった。選手たちは、女子200メートルのマルグレット・ルマット・ルマット・ハッサン選手、男子1、500メートルのサンティノ・ケニ・ワリニヤング・ケニ選手、そして、男子マラソンのゴール・マリアル選手であった。ケニ選手は、第1回「国民結束の日」の参加選手でもあった。初の「国民結束の日」に参加し、そして、南スーダン初の国を代表するオリンピック選手となったのである。

7月24日、ジュバを出発する選手たちは、空港での記者会見で、オリンピックを通じた「平和と結束」を訴えた。空港で記者会見をしたケニ選手は、「南スーダンにとって初めての

オリンピックに参加できることに興奮している。リオでは南スーダンの国旗を掲げたい。オリンピックを通じ、南スーダンの若者に平和と結束を呼びかけたい」と抱負を語った。また、空港で選手を見送ったナディア・アロップ・ドゥディ文化・青年・スポーツ大臣は、JICAの支援に謝意を表するとともに、「スポーツには人々を結束させる力がある。南スーダン政府は南スーダンの平和と結束のためにスポーツを振興していく」と話し、2020年の東京オリンピックでは、より多くの選手を派遣したいと述べた。

そして、8月5日、リオデジャネイロ・オリンピック（平和の祭典）が開幕した。開会式では、南スーダン選手団は誇らしげに国旗を高々と掲げ、本当に嬉しそうに行進をしていた。国として初めての平和の祭典、オリンピックに参加したのである。まさに、南スーダンにとって記念すべき日となった。

陸上競技も開始され、マルグレット・ルマツト・ルマツト・ハッサン選手が女子200メートルに出場し、記録は、26秒99で72人中71位の成績であった。また、サンティノ・ケニ・ワリニヤング・ケニ選手は、男子1,500メートルに出場し、3分45秒27で43人中24位の成績をおさめた。TBSの男子1,500メートル予選の生中継（8月16日）では、初出場国の注目選手としてケニ選手が紹介された。そして、ガオル・マリアル選手は、男子マラソンに出場し、2時間22分45秒のシーズン・ベストを出し、155人中82位であった。

そんななか、JICA ブラジル事務所は、南スーダン・オリンピック委員会事務局長のト  
ン・チョル・デラン (Dr. TONG Chor Malek Deram) にインタビューを実施した。

トング氏は、南スーダンとして初めてオリンピックに参加した現在の感想について「とてもエキサイティングな体験です。私たちの国はまだ若く、オリンピックに参加するのは夢のようです。私たちのチームはまだとても小規模ですが、ここがスタートです。加えて、副大統領や文化・青年・スポーツ大臣、私を含めたオリンピック委員会関係者がここに来られたのも JICA のサポートのおかげです。協力にはとても感謝しています」と話した。また、選手の頑張りや世界のレベルとの差については、「今回は3名の選手がオリンピックに参加しています。そのうち2名はすでに競技を終了しました。200メートルに出場した選手の記録は他の選手に比べ、4秒ほど劣っていました。たったの4秒です。残念ながら私たちの国には十分な施設や設備がまだありません。ですが選手はこれからさまざまな機会を得ていくことになりました。そして選手たちは20歳以下で皆まだとても若い。まだ始まったばかりなのです。これから2020年の東京に向けてスタートです」と語った。

3名の選手たちはメダルには届かなかったものの、堂々と完走した。選手たちの参加は、各種報道を通じて、また、帰国後の選手団の出迎え等を通じて、国民の一体感を生み、さらに、国としてのアイデンティティの醸成へとつながったのであった。

南スーダン教育省事務次官は後日、リオ・オリンピック参加について次のように振り返っている。彼は、「私自身もスーダン時代、陸上の200mの選手で、1992年のバルセロナオリンピックの最終選考までいったが、残念ながらオリンピックには参加できなかった」として、次のように続けた。

「これまでは、スーダンのなかの南部スーダンという位置づけであったが、リオ・オリンピックへの参加は、南スーダンが国として一つの国旗を掲げ参加したものであり、とても感慨深いものであった。スーダン時代では感じたことのない、とても幸せな気持ちとなった。そして、われわれはとても誇りに感じた。それは、出場した選手たちが優秀な成績を収めるとか収めないとかはまったく関係なく、選手たちが国の代表として、オリンピックに出場したこと自体が国家としての誇りなのだ。そのことを痛烈に感じる事ができた。そして、これからも継続して出場したい。東京オリンピックへの出場はとても重要なことである」と語った。

また、エドワード局長に2016年7月の紛争により、リオ・オリンピック派遣はあきらめなかったのかと聞いたところ、彼は、

「どんなことがあるうともJICAは継続して支援してくれると信じていた。あなたの車が被弾したこともJICAが回避したことも知っていたが、必ず、国として初めての参加となるリオ・オリンピックに選手団の派遣支援をしてくれると信じていた。退避する前にあな

たは私に電話をしてくれたことを思い出す。とてもうれしかった。我々を見捨てないと確信していた」と振り返った。アグム事務次官も同様に、紛争があったときも必ずJICAは支援を継続してくれることを信じて疑わなかったとのことであった。

政治・経済・治安面で混乱が続くなか、南スーダンの初めてのオリンピック参加を支援し、実現させたことは、独立から5年を迎えたばかりの若い国において、国民としての一体感と誇りの醸成に貢献したといえよう。そして、困難な状況においても支援を継続するJICAの姿勢は、二国間のさらなる信頼の構築につながった。さらに、文化・青年・スポーツ大臣他は、東京2020オリンピックに向けて選手を育成し、より多くの選手を派遣したいと話すなど、次の東京2020オリンピックへの機運が高まっていったのであった。